

VI 今年度の事業（活動）の総括及び今後に向けて

総合教職キャリアセンター設置準備室 副室長 古川 雅文

今年度、この事業を開始するにあたり、われわれ設置準備室のチームは、まさに手探りの状態からはじめたといっても過言ではない。この事業の骨格を作られた渡邊満教授と伊藤康志前部長が転出されたこともその一因であった。渡邊教授は客員教授として、伊藤部長は7月まで在籍され、われわれを導いていただいた。これら設計者の意図を受け継ぎつつ、設置準備室と委員会の構成員が、それぞれの考えをぶつけ合いながら、一つひとつの事業・活動を計画、実践していったのである。とはいえ、それらは今流行のPDCAの流れに乗ったものではなかった。当面の計画を実行しながら、根本的な考えを修正したり、調査計画を練り直したりといったように、まさに走りながら考えてきた一年といえよう。

したがって、振り返ってみると、まだまだ足りないところ、明確になっていないところもたくさんある。しかし、すべてがかっちり固まっていないところにこそ、この事業の魅力もあると、前向きに考えていきたい。

この報告書では、今年度の活動について、われわれが目指すセンターの活動について、大きく三領域に分けて報告した。ここでも、その三領域について振り返ってみたい。まず、調査研究（Research & Development）に関しては、わが国においては、教師塾と国立大学のキャリアセンターを中心に、ウェブ等で情報を収集するとともに、実際に現地に赴いて、担当者に聞き取り調査をした。実践者に直接聞くことにより、資料やウェブなどで公式に発信している内容以上に、実質的な内容を知ることができた。これからのセンターのあり方を考え、計画、実施していく上で、大変参考になる情報を得ることができた。また、海外に関しても、米国、オーストラリア、ドイツ、スイスの大学等のキャリアセンターを直接訪問し、また、韓国からの研究者を招へいして情報を収集した。これによって、国際的な視野で教員養成のためのキャリアセンターのあり方について、多くの情報と示唆を得ることができた。そして、卒業生への質問紙調査を実施することにより、兵庫教育大学の卒業生が教師としてどのようなキャリアを辿っているのかについて把握することができた。また、「教員養成系大学におけるキャリア教育を考える」シンポジウムも、広い意味で、調査研究の一環といえる。これらのデータや情報は、さらに深く分析をする必要も残されており、また、個々に分析するだけでなく、総合的に考察する必要もある。一年間にしては非常に多くの調査研究がなされたが、来年度にも引き続き検討を続け、センター設置に向けて活用する必要がある。

次に、学習支援（Support）に関しては、さまざまな学生向け講座を実施して、参加者からの評価をまとめた。この試行によって、今後の講座の提供についての示唆を得ることができた。また、プレイスメントテストも実施した。これらの実践については現在も検討が続けられている。また、キャリア教育を専門とする高校現職教員によるキャリアカウンセリングを行い、グループでのワークショップに人気があった。教職関連教材のeラーニングでの提供やラーニングコモンズといった学習

スペース作りは、学生の本分である大学での「学び」を活性化するための、画期的な試みであるといえるだろう。ただ、これらが真に学生の学習の活性化、深化につながっていくのか、これからの取組に期待される。肝心なのは枠組み作りではなく、それを回していく「人」がどれくらい本気で関わっているかであろう。これは、教師という職業の本質と共通していると思う。

最後に、協働・調整 (Coordinate) の領域であるが、この部分に関しては、プロジェクト初年度であることもあり、あまり多くの進展がみられなかった。これまでに独自の活動をしてきた、学生による不登校支援「NANA っくす」の活動を体験活動として位置づけ、協力して行うこととなった。また、全学のボランティア活動やセンターの活動を検討する専門部会が学内で立ち上がり、そこでの総合教職キャリアセンターの位置づけや他のセンターとの連携協力についての検討が始まったところである。本センターの位置づけは、現在の設置準備段階ではまだ流動的などころもあるが、教員養成、就職採用、その後の教職キャリアをすべて視野に入れて学生の教職キャリア発達を支援する本センターがその目的の下、他のセンターと十分に連携協力し、中心となって稼働することが切望される。

さて、それではこの総合教職キャリアセンターは、これから先、どのようなコンセプトの下に、どのような方向に向かうべきであろうか。ここで、些か私見を述べてみたい。

学生のキャリア発達を背景・目的にするセンターを考えると、大きく二つの軸を考える必要がある。一つは、空間と組織の軸である。今回のプロジェクトに関わりながら感じたことの一つに、学生の健全なキャリア発達には、人と人とのつながりが不可欠であるということがある。よい教員、教員就職後も大きな伸び代をもった学生を育てるには、大学の中だけで純粋培養されるのではなく、さまざまな場所へ行き、人々と出会い、さまざまな体験をする必要がある。そして、このことは、総合教職キャリアセンターだけでできることではない。偏狭なセクト主義に陥ることなく、広い視野を持ち、有機的に連携しあってはじめて実現が可能となる。

また、日本のみでなく、世界に目を広げ、そこに行きつて学ぶべきこと、触れあう人々がいることは、海外調査や国内の協力者の話からわれわれが身をもって体験したことである。これからの世界規模の時代にあつて、教員となる学生は、広く世の中のことを知り、世界を知るべきであろう。

もう一つの軸は、時間と発達の軸である。大学生は、日々、さまざまな学習、経験を積み重ねるとともにキャリア発達の途上にある。彼らは常に固定的な同じ人物ではなく、日々変化・発達し、教員への道を進んでいる。総合教育キャリアセンターは、そうした学生のキャリア発達を支援しているということを常に意識しなければならない。また、このような業務を担うセンター自身も、常に発達変化する存在であるべきだ。固定化し、柔軟性を欠いた組織は社会の動きや学生の変化に対応できず、形式のみの活動になりやすい。

キャリアとは、シンポジウムの基調講演でも解説されたように、人生あるいは人生行路のことである。われわれが設置を目指すセンターには、この「キャリア」という語が冠せられている。ここに、このセンターの最も主要な性質が示されている

と考える。また、そのキャリアは教職キャリアであり、教員になる人の一生ということがここでの主題である。しかも、それは総合的に行われなければならない。

私たちは兵庫教育大学の一員として、どのような学生を育てるべきか、どのような支援ができるのかについて、明確なビジョンや目標を共有して教育、支援活動を行っていく必要がある。総合教職キャリアセンターは、単に就職のための実務支援を行うだけでなく、このような研究、考察を背景として活動していく必要がある。

今年度、これらに関してさまざまなことを教えていただいた協力者、すなわち国内外のさまざまな大学教職員、行政関係者、講座の講師および本学の学生、卒業生の皆様に深く感謝する。そして、それらを生かして、真によい教師を育成し、わが国の教育を高めることが、これらの人々への恩返しになると思う。これらもこのような目的をもったセンター設置に向けて努力を続けていきたいと思う。